

劍橋（ケンブリッジ）子育て奮闘記

Short Personal Stories about Raising a Small Child in Cambridge, UK

森 啓 年（もり ひろとし）

（獨）土木研究所 材料地盤研究グループ（土質・振動チーム） 主任研究員

1. プロローグ

平成18年8月から平成20年8月の2年間、人事院長期在外研究員として、イギリスのケンブリッジ大学大学院工学部（地盤工学専攻）に留学する機会に恵まれました。本来なら、留学記として実施した研究内容や、大学院・研究室・カレッジの生活を書くべきなのでしょう。ただ、ケンブリッジ大学での留学生活については諸先輩方が多くの名著・名文を残していらっしゃいます。ここでは、少し趣向を変えて、異国の地で妻と二人三脚で歩んだ渡英時生後4ヶ月の我が息子の子育てについて、英語教育、医療事情、英国人と子供、子連れの外出といった具体のトピックについて個人的な体験をまとめたと思います。

2. 目指せバイリンガル！（英語教育）

あるテレビ番組によると、生後間もない赤ちゃんの脳はどの言語にも対応できるようになっているらしいです。なんて馬鹿親（親馬鹿に非ず）のやる気を奮い立たせるようなトピックでしょうか。父母が味わってきた英会話へのコンプレックスと我が息子は無縁になれる！ そんなことを考えてしまっただけでは、恵まれたこの環境を活かさない手はありません。帰国時には2歳になる我が息子もきっとネイティブのように流ちょうな発音で英語を話してくれるに違いない。と、夢見る乙女状態で勝手なことを考えていました。

イギリスに行っても1年目はまだ片言の日本語も話せないから良いとして、勝負は2年目です。超社交的な妻のおかげで、イギリス人はほとんどいないにしても、中国系やインド系の訛りに満ちた英語がシャワーのように周りを飛び交っています。我が息子もきっと、あの憧れのQueen's Englishでないにしても、少し訛りがある英語が口をついて出てくるに違いない！

そんななか、1歳半の我が息子が初めてしゃべった英単語は「No!」でした。「ノ」が出る前に「ン」で溜め込む、まさにネイティブな「No!」です。しかも、状況に応じて変わる七色のイントネーション。私たちのバイリンガル計画は華々しい第一歩を示しました。この調子でいけば、野郎版宇多田ヒカルも夢じゃない！

次に出てきた言葉は「Mei Mei」でした。ん？こんな英単語あったっけ？我が息子がその単語を発する状況を

考えてみると、自分より小さい女の子の赤ちゃんがいる場合。しかも、中国人。もしかして、これは中国語の“妹妹”？冷静に周囲をみてみると、近所に住む中国系マレーシア人（妻の友人）が我が息子に中国語をしっかりと教え込んでいました。ちなみにこの“Mei Mei”，妹だけでなく「かわいいお嬢さん」（限りなくナンパな言葉）という意味もあるらしく、研究室の香港系イギリス人の友人は大爆笑していました。

何となく歯車が狂い始めた我が息子のバイリンガル計画は自動的にトリリンガル計画へアップグレード（?）。息子の話す言葉は、次第に日英中のちゃんぽんになり、最後は親が面倒くさくなったこともあり、トリリンガル計画は終了したのでした。

3. Give him a Calpole!（医療事情）

海外生活で不安になることの最右翼として医療があげられます。イギリスには薬代を除いて原則無料のNHS（National Health Service）という医療保険制度があり、1年間以上滞在するならば外国人でも加入できます。このNHSではGP（General Practitioner）と呼ばれる家庭医を登録します。登録後、かぜなどの軽い病気は直接そのGPに、ガンなどの重い病気はGPが紹介する専門医にお世話になることとなります。

このNHS、無料というメリットがある反面、多数の人がGPを訪れるため、医療の順番が回ってくるまで長時間の待ち時間があります。登録するGPは、近所の評判などを聞いて選ばないと、医者に診てもらうのに最低でも数日待たなければなりません。

「どうされました？」

「実は3日前に電話したときは39℃の熱が出ていたんですが、今は大丈夫です。」

「じゃ、問題ないですね。」

というショートコントのような会話が実際に繰り返されているのがNHSの現状のようです。ただ、これはあくまでも大人の話で、緊急性が高いと認められる子ども、特に乳幼児は交渉次第でほとんど待ち時間なく、その日のうちに見てくれます。ただ、それも英国流。よほどの重病でもない限り、お決まりのフレーズが繰り返されます。我が息子連れて行った場合も、ほとんどこのやり取りでした。

「どうされました？」

「昨夜から、子どもが39°Cの熱があって、しかも咳が止まらないんです。」

GP, 聴診器でしばし診る。

「まあ、風邪でしょう。(こんなんでも連れてくるなよ、と言う皮肉なニュアンスがたっぷり含まれた言い方) カルポール(子供用解熱剤:シロップ状で甘い)飲ませて、安静にしてください。」

このカルポールが、子供の万能薬のようにだいたいの症状の時に出てくるのがNHSの幼児医療の特徴のようです。ちなみに知り合いのイギリス人は子どもが「カルポール中毒」となると嘆いていました。こういうことが何回か続くと、どうせGPに行ってもカルポールだろうとNHSに行こうとも思わなくなります。それこそGPの狙い、思うつぼなのかもしれません。

4. ゴージャスとは?(英国人と子ども)

イギリス人は子ども好きな人が多いらしく、散歩しているときやスーパーのレジに並んでいるときなど、よく話しかけてくれました。イギリスに来たばかりの頃、家内は話しかけられている内容が全く分からず、“He is Japanese boy.”, “He is six months old.”と適当に話していたら向こうが勝手に大きくなずいて話が盛り上がる(?)ことが多かったらしいです。また、褒めて伸ばす文化なのか、それとも単に東洋人の乳幼児が珍しいのか“So lovely!”とか“He’s very cute.”とかお世辞を言ってくれることも多かったです。ただ、どうしても最後までなじめなかったのが“He’s gorgeous!”という言葉。この目が細くて、彫りが浅くて、鼻が低い、典型的な日本人顔の我が息子のどこがゴージャスなんだ(写真), と思ったものです。ゴージャスとは金髪・青い目、彫りが深くて高い鼻のイギリス人の子どもにこそ使うべき言葉だと日本人の私は思うのですが、所変わればゴージャスの価値観も変わるのでしょうか?

5. 子どものマナー、大人の常識(子連れの外出)

先ほど書きましたように、子ども好きな人が多いイギリスでは、子連れの外出は治安も良いためとても気軽にできます。電車やバスでも席を譲ってくれ、公共交通機関で子どもを抱きながら立っていた経験は全くといってもいいほどありませんでした。

ただ、これもTPOをわきまえる必要があり、子連れで夜遅く外出することや、高級なレストランへ行ったりするのは、かなり勇気のいる行動になります。例えば、我が息子は比較的小子どもが騒ぐことに寛容なロンドンの



写真-1 超えられない壁

中華街のレストランであっても、レッドカード一発退場になったことがあります。また、友人は夜10時頃にロンドンの駅に子連れでいたところ、見知らぬおじさんにこんな夜遅くに子連れで外出するな、と説教をされたそうです。実際に、パブなどではお酒を出す免許の規定で夜は8時30分以降の子どもの入場自体を断っているところが多いので、イギリスを子連れで旅行される際は、早寝早起きの規則正しい生活を心がけるのが良さそうです。

6. エピローグ

子どもは吸収が早いと言われますが、忘れるのも早いらしく、帰国後4ヶ月で我が息子の口から出る日本語以外の単語は“No!”だけとなりました。ほんの短い間でもバイリンガルを目指した両親としては、寂しくもありますが、環境順応だとポジティブに誤魔化していきたいと思います。ただ、家内の実家に住んでいる3歳の姪っ子が口癖が移ったのか“No!”を使うようになり、未だ剣橋後遺症をひきずっています。ちなみに、我が息子は保育園でイギリス人のおばちゃん保育さんから学んだ、中年女性特有の頬への濃厚なキスも得意でしたが、こちらは幸いなことに帰国後すぐに忘れたようです。

最後になりましたが、留学生生活をさまざまな面からサポートしていただきましたケンブリッジ大学の曾我健一教授、曾我美紀子先生をはじめお世話になった皆様に厚く御礼申し上げます。また、英語もほとんど話せなかったのに英国まで付いてきてくれた妻と慣れない海外生活にもかかわらず健康優良児だった息子に心より感謝します。

(原稿受理 2008.10.17)